

## スポーツにおける目標志向性のメカニズムに関する研究

松木 航 粟木 一博

キーワード： 身体活動 目標志向性 認知要因 動機 行動

### Research on the mechanism of goal orientation in sports

Kou Matsugi Kazuhiro Awaki

#### Abstract

This research study consists of two sections.

The purpose of the first section was to clarify the relationship between goal orientation and selected situations in physical activities, such as situations in physical education, practice sessions and games in competitive sports.

Questionnaires were administered in May 2006 to 201 students (males 120 and females 81) at a college specializing physical education and sport.

As the result of factor analysis of the items on goal orientation, all the three situations were found two common dominant factors such as the first factor of "result goal" and the second factor "skill goal."

The purpose of the second section was to clarify the mechanism of goal orientation in various situations in physical activities.

Questionnaires were administered in October 2006 to 195 students (males 121 and females 74; senior students were excluded), enrolled at a college of physical education and sport. Contents of the questionnaire consisted of individual subjective cognitive factors, which assumed to affect the goal orientation, such as optimism, gender, cause recognition, and self evaluation.

As a result of executing the scatter analysis of two factors (target intention  $\times$  situation), both factors are inherent in the subject, the "result goal" tended to be significantly higher than the "skill goal."

Key words : physical activity cognitive factor motivation behavioral pattern

#### 1. 緒言

初期の動機づけ理論について

動機づけ研究において達成が取り扱われるようになったのは、Murrayら(1938)によって社会的欲求リストの中に達成が含まれていたことに端を発する。この達

成への要求に着目した McClelland, Atkinson (1953)らによって投影法による達成動機の測定法を開発したことがきっかけとなり、動機づけ研究は発展していった。

上淵(2004)は心理学において、動機づけという心理現象は、主に「欲求」、「情動」、「認知」という心理的

な要素をそれぞれ重要視する理論に大別して考えられるとしている。

認知という心理的な要素をそれぞれ重要視する理論に目標理論がある。目標理論とは、「動機づけ」を何らかの目標があるからこそ、行為が起こるという視点から説明を試みる一連の理論の総称で、ここでいう「目標」とは、個人の内的な認識に基づく心理現象である。したがって、外的に目標が掲げられても、その目標が個人の内部に位置づかないと機能しないという性質を持つ。

目標理論の中で最も重要な概念として「達成目標」がある。達成目標とは、個人がある目標へ到達するために掲げる目標を意味し、個人が設定する目標や意味づけの違いによって、目標に到達する手段・方法・過程に影響を与え、目標設定後の行動を変化させるものと考えられている。

## II. 研究 I

### 1. 問題

スポーツ場面における目標志向性に関する研究はこれまで多く行われてきた。たとえば、田口・中込 (1994) や、細田・杉原 (1999) は中学校の体育授業場面について目標志向性を測定している。

伊藤 (1996) は、高校生を対象としてスポーツにおける目標志向性を測定しており、小方 (1998) は、大学生を対象にし、スポーツ競技の大会という場面に對して目標志向性を測定している。このように目標志向性を測定した場面は、体育の場面や、競技スポーツ場面などの単一状況に限定した研究が多い。状況を認知要因として扱い、場面において目標志向性との関連性に着目した研究は少ない。

### 2. 研究目的

太田 (2006) は主観的競争状況における目標志向性に関して研究を行っている。主観的に競争的だと思う場面「スポーツの試合のとき」、競争的だと思わない場面「アルバイトをしているとき」の二場面を設定し、目標志向性を測定した。その結果、スポーツ場面では「勝利志向」、「努力志向」、「関係維持志向」。アルバイト場面では「優越志向」、「非競争志向」という異なる目標の構造を明らかにしている。

しかし、太田 (2006) のように競争的と認知しやすいスポーツの場面と、競争的と認知されにくいアルバイト場面のような全く異なる場面では、達成目標に違いが生じることは容易に推測できる。

そこで研究 I の目的は、全く異なる場面ではなく、「体育運動の場面」、「競技スポーツ練習場面」、「競技スポーツ試合場面」という身体活動の枠組み内での、異なる場

面においても太田 (2006) のように異なる目標構造が見られるかを明らかにし、スポーツ活動の場面と目標志向性との関係を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究方法

調査対象は体育系大学の学生を対象とし、男性 120 名、女性 81 名、合計 201 名であった。

平成 18 年 4 月下旬に質問紙調査を実施した。

目標志向性の質問項目について、伊藤 (1996) を参考に「体育運動の場面」と「競技スポーツの練習場面」、「競技スポーツの試合場面」において適用が可能なように、項目の精選をおこない 17 項目からなる質問紙を作成した。

### 4. 結果

因子分析をおこなった結果、「体育運動の場面」、「競技スポーツの練習場面」、「競技スポーツの試合場面」のすべての場面において第一因子に「自分が一番うまくできるとき」「自分が一番良い結果を出したとき」などの項目から構成されている「成績目標」、第二因子に「がんばって、新しい技やプレーに挑戦しているとき」「自分の目標に向かって、一生懸命試合しているとき」などの項目から構成されている「熟達目標」という共通した因子構造が見られた。これは伊藤 (1996) と同様の結果であった。

目標の志向性について異なる場面（この場合は体育の授業や競技スポーツなど）が目標志向性にどのような影響を与えているのかを検討するために、抽出された「成績目標」因子と「熟達目標」因子、それぞれの合成得点を算出し、各場面による比較を行った。(図 1 参照)

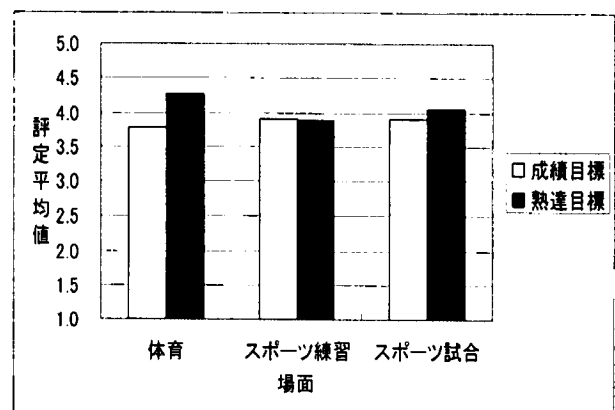


図 1. 各場面の合成得点における「成績目標」と「熟達目標」の比較

各場面における「成績目標」と「熟達目標」の比較の結果、体育運動場面において「熟達目標」の値が「成績目標」と比較して高かった。

スポーツの練習場面では目標の志向性に差がほとんど無く、スポーツの試合場面に関しても、差は少なかった。

## 5. 考察

体育授業でのスポーツ活動とクラブや部活動のスポーツ活動の両場面それぞれについて分析の結果、成績目標と熟達目標の二つの志向性を因子として抽出した。

伊藤 (1995) によると、熟達目標の特徴は他者との比較よりも、努力したという学習の過程そのものを重要視し、能力を伸ばすことや何かに熟達することに関心を持つとしている。また、成績目標の特徴は、他者との比較や勝利することを重要視する。

体育運動という場面は、他者との比較よりも、努力したという学習の過程そのものを重要視し、能力を伸ばすことや何かに熟達することが重要とする傾向があり、勝利することよりも、仲間と協力したり、技術を向上させる喜びを体験することの方が重要だと認知していると考えられる。したがって、体育運動の場面においては成績目標よりも、熟達目標の平均値が高かったものと考えられる。

競技スポーツの場面に関しては、競技スポーツが有する競争という特性から、成績目標を志向することは自然な考えであるが、加えて、「能力を伸ばすこと」などの熟達目標を志向することも同様に重要だと認知しているために、目標の志向に差が無かったと考えられる。

## Ⅲ. 研究 2

### 1. 問題

伊藤 (1996) や細田・杉原 (1999) などによって目標志向性と原因帰属、競技達成動機、競技不安、有能さ、内発的動機づけ、性別などの個人要因との関連は検討されている。しかし、このような個人要因がどのように目標志向性に関わっているのかという、目標志向性の構造に着目した研究は少ない。

### 2. 研究目的

細田・杉原 (1999) や太田 (2006) などの先行研究から、自己の能力認知 (有能さ) や場面認知などの主観的認知要因が、目標の志向性に影響を与えることは明らかである。そこで、目標の志向性に影響を及ぼす個人の主観的認知要因として、楽観性、性差、原因認知の統制位置、自己評価を取り上げる。

体育授業でのスポーツ場面とスポーツ活動の試合場面について、質問紙調査の結果から得られる各場面での目標志向性と、個人の主観的認知要因を詳細に検討し、身体活動における目標志向性のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究方法

調査対象はS体育大学の学生を対象とし、2006年10月に質問紙調査を実施した。調査人数は、男性121名、女性74名、合計195名であった。(4回生を除く。)

質問項目は、目標志向性尺度17項目×2場面、楽観性尺度12項目、BSRI 日本語版60項目、Locus of Control 尺度18項目、自己評価尺度10項目から構成されている。各尺度に関して回答しやすいように、5:よくあてはまる 4:ややあてはまる 3:どちらともいえない 2:ややあてはまらない 1:まったくあてはまらないと、すべての尺度において5件法に統一した。

目標志向性尺度は、研究1の尺度を使用する。

## 4. 結果

性別(生物学上の分類)と目標志向性の関連性について性別についてそれぞれ二要因(目標志向×場面)の分散分析(二要因とも被験者内要因)を実施した。

その結果、男性について目標の志向性について有意な主効果が見られた( $F=19.29, df=1/423, p<0.00$ )。

女性について二要因(目標志向×場面)の分散分析(二要因とも被験者内要因)を実施した。その結果、女性については、有意な差は見られなかった( $F=0.91, df=1/215, n.s.$ )。

### 種目と目標志向性の関連性について

競技種目を団体種目と個人種目に分類し、団体種目と個人種目について二要因(目標志向×場面)の分散分析(二要因とも被験者内要因)を実施した。

団体種目について二要因(目標志向×場面)の分散分析(二要因とも被験者内要因)を実施した。その結果、目標の志向性( $F=15.84, df=1/315, p<0.001$ )と場面( $F=7.43, df=1/315, p<0.01$ )について有意な主効果が見られた。

個人種目について二要因(目標志向×場面)の分散分析(二要因とも被験者内要因)を実施した。

その結果、目標の志向性について有意な主効果が見られた( $F=7.36, df=1/223, p<0.01$ )。

### 現在のスポーツ活動の雰囲気と目標志向性に及ぼす影響について

現在自分が行っているスポーツ活動(クラブやチームでの活動)に対して、その活動がどのような雰囲気で行われているかという認知に関して 1:勝利志向的な雰囲気 2:どちらかといえば勝ちを意識した雰囲気

3:練習の成果を出せばいいとされる雰囲気 4:スポーツを行うこと自体が楽しい雰囲気 4つの雰囲気で回答を求めた。この4つの雰囲気認知それぞれにつ

いて二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。

勝利志向的な雰囲気について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、目標の志向性について有意な主効果が見られた（ $F=6.18, df=1/159, p<0.05$ ）。

どちらかといえば勝ちを意識した雰囲気について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、目標の志向（ $F=14.32, df=1/243, p<0.001$ ）と場面（ $F=9.51, df=1/243, p<0.01$ ）について有意な主効果が見られた。

練習の成果を出せばいいとされる雰囲気とスポーツを行うこと自体が楽しい雰囲気については有意な主効果は無かった。

現在の自分自身のスポーツに対する認知が目標志向性に及ぼす影響について

現在、自分が行っているスポーツに対して、自分がどのようにそのスポーツを認知しているかを 1：勝利志向的 2：どちらかといえば勝ちたい 3：勝っても負けてもいいと思っている 4：スポーツを行うこと自体が楽しみだ の4つで回答を求めた。この4つそれぞれについて二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。

勝利志向的と認知した者について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、勝利志向的と認知している者は目標の志向性について有意な主効果が見られた（ $F=9.66, df=1/199, p<0.01$ ）。

どちらかといえば勝ちたい、勝っても負けてもいいと思っている、スポーツを行うこと自体が楽しみだと認知した者については、有意な主効果は無かった。

楽観主義認知が目標志向性に及ぼす影響について

楽観主義尺度に関して平均値より高い値を示した者を高楽観主義群とし、平均値以下の値を示した者を低楽観主義群と分類した。この高楽観主義群と低楽観主義群について二要因（目標志向性×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。

高楽観主義群について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、目標の志向性に有意な主効果が見られた（ $F=11.50, df=1/287, p<0.001$ ）。

低楽観主義群について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、目標の志向性について有意な主効果が見られた（ $F=5.23, df=1/351, p<0.05$ ）。

性役割に関する認知（BSRI）が目標志向性に及ぼす影響について

男性性尺度項目得点と女性性尺度項目得点を測定し、男性性高群と女性性高群それぞれについて二要因（目標志向性×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。

男性性高群について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、目標の志向性について有意な主効果が見られた（ $F=10.85, df=1/355, p<0.01$ ）。

女性性高群について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、女性性高群については有意な差は見られなかった（ $F=3.58, df=1/319, n.s.$ ）。

原因認知の統制位置（Locus of Control）が目標志向性に及ぼす影響について

内的項目得点と外的項目得点を測定し、内的項目の得点が平均値以上を内的高群とし、平均値以下を内的低群とした。外的項目の得点が平均値以上を外的高群とし、平均値以下を外的低群とした。

内的高群、内的低群と外的高群、外的低群それぞれについて二要因（目標志向性×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。

内的低群について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、目標の志向性について有意な主効果が見られた（ $F=19.73, df=1/319, p<0.001$ ）。

外的高群について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、目標の志向性（ $F=21.99, df=1/319, p<0.001$ ）と場面（ $F=5.45, df=1/319, p<0.05$ ）について有意な主効果が見られた。

内的高群と外的低群については有意な主効果は見られなかった。

自己評価が目標志向性に及ぼす影響について

自己評価得点を測定し、自己評価得点が平均値以上を自己評価高群とし、平均値以下を自己評価低群とした。自己評価高群と自己評価低群それぞれについて二要因（目標志向性×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。

自己評価高群について二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、目標の志向性について有意な主効果が見られた（ $F=5.70, df=1/299, p<0.05$ ）。

自己評価低群について二要因（目標志向×場面）の分

散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、目標の志向性について有意な主効果が見られた（ $F=10.81, df=1/339, p<0.01$ ）。

##### 5. 考察

研究2の目的は、体育授業でのスポーツ場面とスポーツ活動の試合場面、それぞれの目標志向性と個人の主観的認知要因を詳細に検討し、身体活動における目標志向性のメカニズムを明らかにすることであった。

スポーツ活動に対する雰囲気に関する質問項目に対して、「勝利志向的な雰囲気」、「どちらかといえば勝利を意識した雰囲気」と回答した勝利意欲や勝利志向が高い雰囲気であると認知したものについて、目標の志向性に有意な差が見られた。これは、体育の場面、スポーツの場面の両場面について成績目標が熟達目標より高い傾向を示すものであった。これは、対象を体育系大学でスポーツを行っている者としたために、勝利することや記録を更新することを目的とした競技スポーツ要素の高いクラブや部に所属しており、スポーツに対しての勝利意欲や勝利志向の傾向が、もともと高かったことが影響したことが原因であると考えられる。

現在の自分自身のスポーツに対する認知についても、「勝利至上主義」と認知した者はそれぞれの場面において、成績目標志向が熟達目標志向の得点よりも高い傾向が得られた。これにも対象者のスポーツに対する勝利意欲や勝利志向が高かったことが影響したものと考えられる。

楽観性については、楽観性尺度の得点が高い群（高楽観性群）、低い群（低楽観性群）それぞれに対して二要因（目標志向性×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、高楽観性群、低楽観性群の両群に目標の志向性について有意な主効果が見られ、熟達目標よりも成績目標を志向する傾向が見られた。これは、予測と異なる結果であった。

楽観的な志向傾向のある者は、自分の能力を今よりももっと向上させることができるという熟達的な志向と、勝利することや良い成績を出せるという成績志向的な見通しも併せ持つ傾向があると考えられる。このことと、スポーツに対する勝利意欲や勝利志向の傾向が、もともと高い対象者の特性が影響したと考えられる。

性差については、まず、従来通りの生物学上での分類により（男性・女性）について二要因（目標志向性×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、男性においては熟達目標よりも成績目標を志向する傾向が見られたが、女性においては有意な差は無かった。この結果は、Duda (1989) や小縣・西田 (2006) などの先行研究と一致している。次に、性役割に関する

自己概念により対象者を分類し、それぞれについて二要因（目標志向性×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した。その結果、男性性が高い者は、それぞれの場面において、熟達目標よりも成績目標を志向する傾向が見られたが、女性性が高い者においては有意な差は無かった。性役割に関する自己概念での分析の結果、男性性が高い者は熟達目標より成績目標を志向する傾向があることが明らかになった。このことから、目標志向性に影響を及ぼす要因として、生物学上での性差に加えて、主観的認知要因としての性役割概念での性差が考えられるようになった。

原因認知の統制位置（内的・外的要因帰属傾向）については、伊藤 (1996) が成績目標を志向する者は、失敗の原因を外的要因に帰属する傾向が高いが、熟達目標を志向する者は、失敗の要因を外的要因に帰属しない結果が得られている。これは、成績目標を掲げるものが内的要因に帰属を行うということは、もし失敗した場合自分の能力が劣っているという結果を導くことになるからだと考えられる。このことから考えると、内的要因に帰属する者は熟達目標を志向する傾向があると予測でき、反対に外的要因に帰属する者は、成績目標を志向する傾向があると予測した。内的高群、内的低群と外的高群、外的低群それぞれ二要因（目標志向性×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した結果、内的低群に体育場面とスポーツ場面それぞれの場面において、成績目標志向が熟達目標志向の得点よりも高い傾向が得られ、外的高群に体育場面とスポーツ場面それぞれの場面において、成績目標志向が熟達目標志向の得点よりも高い傾向と、スポーツの試合の場面が体育のスポーツ場面よりも高い得点を示す傾向が得られた。

外的高群に関しては予測と一致する結果であった。つまり、外的要因に原因の帰属をする者は、スポーツ場面において成績目標を志向すると言える。

内的低群に関して、成績目標志向が熟達目標志向の得点よりも高い傾向が得られたことにより、内的要因に帰属する者は熟達目標を志向するという予測とは異なる結果であった。この結果は対象者が体育系大学生だったためと考えられる。対象者は、現在スポーツ活動を行っている者がほとんどあり、勝利する事や記録を更新する事を目的とした競技スポーツ要素の高いクラブや部に所属していると考えられる。現在自分自身の行っているスポーツに対する勝利志向傾向を問うた質問において、「勝利至上主義」、「どちらかと言えば勝ちたい」という勝利を志向する傾向の高い者が160人中100人であったことから、勝利することを目標にする者が多かった結果であると考えられる。これは勝利を志向する傾向の高い、競技スポーツに特有な結果であるとも考えられる。

自己評価については、自己評価が高い者は、内的要因に帰属する者の傾向と類似し積極的な行動をとるため、目標志向性に関しても同様に、熟達目標を志向する傾向があると考えられる。また、自己評価が低い者は消極的な行動をとるため、外的要因に帰属する者と同様に目標志向性はどちらの目標に関しても志向性が低い値を示すという予測した。自己評価高群と自己評価低群について二要因（目標志向性×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を実施した結果、自己評価が高い群と自己評価の低い群の両群で目標の志向性に有意な差が見られ、成績目標志向が熟達目標志向の得点よりも高かった。

しかし、この自己評価についての分析結果には問題があった。評価の高群と低群に分類するため、平均値を算出した結果、平均値は34.3であった。（得点範囲45～29）よって、対象者のほとんどが平均値以上であったため、自己評価に関しては高群と低群で比較することはできない。よって、自己評価高群と自己評価低群について統計的に有意な差が見られたが、目標志向性と自己評価との関連性は明らかにできなかった。このことについては、今後さらに研究しなければならない課題である。

#### IV. まとめ

研究1では、「体育運動の場面」、「競技スポーツ練習場面」、「競技スポーツ試合場面」という、身体活動の場面の違いによる目標志向性の傾向を明らかにすることを目的とした。

伊藤（1996）の目標志向性尺度を参考に、修正を加えた質問紙を作成し、質問紙調査によって目標志向性を測定した。その結果、身体活動における達成目標として、「成績目標」と「熟達目標」の二つの目標が存在することを確かめた。

体育運動場面において「熟達目標」の因子得点の平均値が「成績目標」と比較して高かった。これに対して、スポーツの練習場面では差がほとんど無く、同様にスポーツの試合場面に関しても差は小さかった。

体育運動場面では、他者との比較や競争よりも、努力したという学習の過程そのものが重要視される傾向があり、勝利することよりも仲間との協力や、技術を向上させる喜びを体験することの方が重要だと認知しているため、成績目標よりも熟達目標の因子得点の平均値が高かったものと考えられる。競技スポーツの場面に関しては、競技スポーツが有する競争という特性から、成績目標を志向することは自然な考えであるが、加えて、「能力を伸ばすこと」などの熟達目標を志向することの重要性も同様に認知していることが、目標の志向性の因子得点の平均値に差が生じなかった原因だと感がえられる。

研究2では、「楽観性」、「性差」、「原因認知の統制位

置」、「自己評価」の主観的認知要因がどのように目標志向性に関わっているのかという、目標志向性の構造に着目し、身体活動場面における目標志向性のメカニズムを明らかにすることを目的とした。

調査方法は、目標志向性尺度を用いて、「体育の場面」と「スポーツの試合場面」それぞれの場面における目標の志向性の傾向を調べた。また、認知要因（楽観性、性差、原因認知の統制位置、自己評価）に関する質問紙も同時に実施した。そして、各主観的認知要因に関して二要因（目標志向×場面）の分散分析（二要因とも被験者内要因）を行った。

楽観性については、高楽観性群、低楽観性群の両群に目標の志向性について有意な主効果が見られ、熟達目標よりも成績目標を志向する傾向が見られた。楽観的な志向傾向のある者は、自分の能力を今よりももっと向上させることができるという熟達的な志向と、勝利することや良い成績を出せるという成績志向的な見通しも、併せ持つ傾向があると考えられる。このことと、スポーツに対する勝利意欲や勝利志向の傾向が、もともと高い対象者の特性が影響したと考えられる。

性差については、従来通りの生物学上での分類では、男性においては熟達目標よりも成績目標を志向する傾向が見られたが、女性においては有意な差は無かった。次に、性役割に関する自己概念による分類では、男性性が高い者は、それぞれの場面において、熟達目標よりも成績目標を志向する傾向が見られたが、女性性が高い者においては有意な差は無かった。性役割に関する自己概念での分析の結果、男性性が高い者は熟達目標より成績目標を志向する傾向があることが明らかになった。よって、目標志向性に影響を及ぼす要因として、生物学上での性差に加えて、主観的認知要因としての性役割概念での性差が考えられる。

原因認知の統制位置（内的—外的要因帰属傾向）については、内的低群に体育場面とスポーツ場面それぞれの場面において、成績目標志向が熟達目標志向の得点よりも高い傾向が得られ、外的高群に体育場面とスポーツ場面それぞれの場面において、成績目標志向が熟達目標志向の得点よりも高い傾向と、スポーツの試合の場面が体育のスポーツ場面よりも高い得点を示す傾向が得られた。外的要因に原因の帰属をする者は、スポーツ場面において成績目標を志向すると言える。内的低群に関しては、成績目標志向が熟達目標志向の得点よりも高い傾向が得られたことにより、内的要因に帰属する者は熟達目標を志向するという予測とは異なる結果であった。この結果は、対象者が体育系大学生だったため、対象者に勝利することを目標にする者が多かった結果であると考えられる。これは勝利を志向する傾向の高い、競技スポーツに

特有な結果であるとも考えられる。

自己評価については、自己評価が高い群と自己評価の低い群の両群で目標の志向性に有意な差が見られ、成績目標志向が熟達目標志向の得点よりも高かった。しかし、この自己評価についての分析結果には問題があった。ほとんどの者が平均値以上であったため、自己評価高群と低群について統計的に有意な差が見られたが、目標の志向性と自己評価との関連性は明らかにできなかった。このことについては、今後さらに研究しなければならない課題である。

## V. 参考引用・文献

- 東清和 (1990) 心理的両性具有。—BSRI による心理的両性具有の測定—早稲田大学教育学部学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育編) 39:25 - 26.
- 東清和 (1991) 心理的両性具有「—BSRI 日本語版の検討—早稲田大学教育学部学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育編) 40:61 - 71.
- Christophe, A (1999)L' ESTIME DE SOI (高野優 [訳] 2000 「自己評価の心理学」紀伊國屋書店)
- Duda,J. (1989) Relationship between task and ego orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology* 11:318 - 335.
- Duda,J.,& Nicholls,J.G. (1992) Dimensions of achievement motivation in schoolwork and sport. *Journal of Educational Psychology*.84:290 - 299.
- Dweck,C.S.(1986) Children's interpretation of evaluative feedback:The effect of social cues on learned helplessness. *Merrill - Palmer Quarterly*,22:105 - 109.
- Dweck,C.S., & Leggett,E.L (1988) A social - cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*,95:259 - 273.
- Freud,S. (1933) *New introductory lectures on psycho analysis*.New York:W.W.Norton,1961.
- Gill and Deeter (1988) Development of the sport orientation questionnaire.*Research Quarterly for Exercise and Sport*,59:191 - 202.
- 細田・杉原 (1999) 体育の授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響。日本体育学会第 48 回大会号 pp208.
- 細田・杉原 (1999) 体育の授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響。体育学研究,44:90 - 99.
- 磯貝浩久 (2002) 日本スポーツ心理学会第 29 回大会号
- 伊藤 篤 (1995) 達成目標と動機づけ。新井邦二郎編 著 教室の動機づけの理論と実践。金子書房 pp.76 - 91.
- 伊藤豊彦 (1996) スポーツにおける目標志向性に関する予備的検討 体育学研究 41:261 - 272.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982) Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討。教育心理学研究 30:302 - 307.
- McClelland,D.C.,Atkinson,J.W.,Clark,R.A.,&Lowell,E.L. (1953) *The achievement motive*. New York:Appleton - Century - Crofts
- 宮本美沙子・奈須正裕 (1995) 達成動機の理論と展開—統・達成動機の心理学—金子書房
- Murray,H.A.et al., (1938) *Explorations in personality*. New York:Oxford University Press. 外林大作 (訳) パーソナリティ 誠信書房
- 中村陽吉 (編著) 2000 対人場面における心理的個人差—測定対象についての分類を中心にして プレーン出版
- Nicholls,J.G.(1983) Conceptions of ability and achievement motivation:A theory and its implications for education.In:Paris,S.G.,Olson,G.M.,and Stevenson,H.W (Eds.) *Learning and motivation in the classroom*. Lawrence Erlbaum Associates:New Jersey. pp.211 - 237.
- Nicholls,J.G. (1984a) Conceptions of ability and achievement motivation. In R.Ames & C.Ames(Eds.) *Research on motivation in education Vol.*New York:Academic Press.
- 西田保 (2003) スポーツモチベーション 体育の科学 Vol.53 No.5 pp.348 - 353.
- 小縣真二・西田保 (2006) Nagoya J.Health, Physical Fitness, Sports Vol.29.No.1 pp.41 - 49.
- 小方涼子 (1998) 課題達成場面における目標志向性とパフォーマンスとの関係。教育心理学研究, 第 46 巻 第 4 号 pp.387 - 394.
- 太田伸幸 (2006) 主観的競争状況における目標志向性—一場面の競争性の高さによる検討—愛知工業大学研究報告, 第 41 号 A .pp.33 - 40.
- Roberts(2001) *ADVANCES IN MOTIVATION IN SPORT AND EXERCISE* by Roberts Human Kinetics Publishers,Inc. (中島宣行 [監訳] 2004 「モチベーション理論の新展開」創成社)
- Roberts,G.C. and Treasure,D.C. (1995) Achievement goals, motivational Climate and achievement strategies and behavior in sport.*International Journal of Sport Psychology*,26:64 - 80.
- 杉山哲司・濱島隆幸 (2000) スポーツにおける目標志

- 向性に関する研究 日本体育学会第51回大会号  
pp.207.
- 田口多恵・中込四郎 (1994) 体育授業における目標の  
志向性が学習態度に及ぼす影響 日本体育学会第45  
回大会号 pp.234.
- 上淵寿 (1995) 達成目標志向性が教室場面での問題解  
決に及ぼす影響 教育心理学研究 第43巻 第4号  
pp.392 - 401.
- 上淵寿 (2004) 動機づけ研究の最前線. 北大路書房
- Vealey.R.S (1986) Conceptualization of sport - confi-  
dence and competitive orientation:Preliminary investi-  
gation and instrument development. Journal of Sport  
Psychology,8:221 - 246.
- Vealey.R.S (1988) Sport - confidence and competitive  
orientation:An addendum on scoring procedures and  
gender differences. Journal of Sport and Exercise  
Psychology,10:471 - 478.